地域活動のススメ　～　地域のつながりの回復をめざして　～

川に学ぼうかい in 浦上川

１．はじめに

現在、社会問題や環境・防災などの様々な地域課題を解決するために、より良い地域づくりに向けて、様々な地域活動が展開されている。その際、それぞれの地域資源や人材を活かして、地域のつながりを回復させていく継続的な取組みが必要となっている。

川に学ぼうかい in 浦上川は、長崎市内で最も大きな川である浦上川の中流部をフィールドとして、2005 年８月から活動を行っている。会のメンバーは、浦上川とその流域に生活・仕事や学校等で関わりのある社会人や大学生など有志を中心に構成している。

初回は３名で開始した活動も、今では２ヶ月に１回の定例活動に概ね 10～30 名前後のメンバーが参加し、2010 年６月の活動で第 30 回となった。

ここでは、会の５年間の活動から見出されたフィールドの可能性を踏まえ、地域のつながりの回復をめざして、地域活動の進め方について提案したい。

２．会の活動の趣旨とポイント

会の活動は、主に長ぐつをはいて浦上川の流れにふれながらゴミを集めるという簡単なものである。こうした体験を通して、生きものたちや森から海までのつながりなど環境や防災のこと、浦上川に関わる貴重な歴史や平和のことなどを意識しつつ、無理せず楽しみながら、たとえ少人数でも息の長い活動を続けていきたいと考えている。

第 30 回定例活動のようす（10.6.12）

ささやかな活動だが、自由な視点で川に学びながら、少しずつ私たちのライフスタイルを見つめなおしていけたらいいな･･･と願っている。

活動のポイントとしては、清掃だけを目的とせず、身近な自然とのふれあいによる体験活動を重視している。ゴミを拾うことには限界があり、また、自由な視点で川に学ぶことをめざしているため、ゴミや生きものの様子を観察したり、活動の手を休めてボーっと物思いにふけってもＯＫ、とメンバーにも伝えている。

３．活動から見出されたフィールドの可能性

５年間の活動を通して、「何となくゴミが多いよね」「試しにやってみよう」と、ゴミ拾いからスタートした時点では思いもよらなかったフィールドの可能性がわかってきた。

◇自然とのつながりを実感できる場であること

川の自然な空間で過ごす時間は、元気や癒しを与えてくれる、との意見が多い。

また、フィールドは感潮区間の最上流にあたり、川と海を回遊するアユや、淡水魚で下流部に暮らすナマズなどを見ることができる。これらは長崎市のレッドリストにおいて、絶滅が危惧される生きものであり、生物多様性の観点からも活動の必要性がわかってきた。

さらに、川を流れる水は、地球全体、あるいは地域の自然の中で、さまざまな形で循環している。また、川のゴミは上流から流れてきたりするものであり、拾われなければいずれ河

口から海へと漂流する。

活動の中では、水質のことやゴミの由来など、自然のメカニズムを含めて話し合うことも多い。水質では、生活排水や、水の量の変化、生きものや植物の分布などを考えるきっかけとなる。また、ゴミの由来では、発生源の推理や、海にいたる漂流漂着ゴミの問題を考えたりすることもある。限られた空間での活動ではあるが、水とゴミを通じて考えることは、地域の枠を超えていく。

◇参加者がつながる場や、様々な発見の場であること

定例活動には、学生から定年退職者まで幅広い世代が参加し、各世代のメンバーがゆるやかにつながる場となっている。会には子ども連れで参加される方もいる。水辺で魚を探したり、家族と一緒にゴミを拾う作業を楽しみながら、家族の絆を再確認したり、環境学習の場所としても役立っているようである。また、他の参加者に声をかけられたりして、子どもが地域社会と接する場としても効果がある。

また、広報の一環として、ポスターとＨＰに掲載している「川まな便り」には、活動を通してメンバーが気づいた様々な発見が寄せられている。

◇歴史的・時間的なつながりを再認識できる場であること

浦上川が関連する歴史的事項として、長崎が西洋との玄関口であった江戸時代から明治初期の**キリシタン弾圧**、東アジア進出の重要拠点にもたらされた 1945 年８月９日の**原爆投下**、東シナ海特有の「湿舌」により、日本最大１時間雨量 187mm を記録した 1982 年７月 23 日の**長崎大水害**の３つが挙げられる。

フィールドは、潜伏キリシタンの関連史跡群が隣接し、また、被爆した石積護岸が、長崎大水害直後の改修でも保存された空間となっている。

このため、活動や意見交換を通じて、この場所に刻まれた深い歴史性を再認識することができる。

フィールドと地域資源

浦上川の位置

４．地域活動のススメ　　～　地域のつながりの回復をめざして　～

今日、人口減少や少子高齢化、グローバル化の進展の中で、地域力が低下し、地域のつながりが希薄化している。こうした状況下で、地域コミュニティのつながりを取り戻し、これからの時代に対応できるように再構築していくことが必要である。

したがって、これからの地域づくりにおいては、地域の社会問題や環境、防災、景観、維

持管理などの様々な課題に対して、地域活動の促進が、極めて重要となると考えられる。
　こうした視点から、地域のつながりの回復をめざして、各地で実際に地域活動を継続して進めていくためのヒントについて、会での取組みを踏まえて以下に提案したい。

①フィールドの特徴や魅力を活かした地域活動の企画・実践

◆一般に、各々の地域における様々なフィールドは、森・里・川・海のつながりや、まちの姿、産業などが関連しあって、場所毎に様々な特徴や魅力を有している。

★会では、フィールドである浦上川中流部と森から海までのつながりを意識した活動を心がけ、森林や魚類などに詳しいメンバーのアドバイスを受けながら理解を深めてきた。一方、専門知識を持たない参加者からも、自由に意見を聞いている。こうした意見は、専門家にとって活動のヒントになる。また、意見を聞いてもらえる体験は、社会活動に参加しているという満足感にもつながる。

●地域活動の企画・実践では、こうしたフィールドの特徴や魅力を十分考慮し、拠点の場所や範囲、活動メニューや開催頻度等を適切に設定するべきと考える。その際、野外における安全確保や気象変化等への適切な対応も必要である。

②継続的な活動の基盤となる組織運営と人づくり

◆組織として透明性を確保しながら継続的な活動を粘り強く実施していくことは、おそらく、地域住民の意識を高めていく上で、大きな説得力を持つことにつながる。

★会では、会の規約や役員を定め、年次総会で活動報告や会計監査報告、活動方針に関する意見交換を行ってきた。また、行政による傷害保険や支給品等の支援制度を活用し、自治会の了解を得て、集めたゴミをゴミステーションに集積する等の連携を図ってきた。さらに、メンバーのやる気や主体性を尊重し、無理せず可能な時に参加できる活動としてきた。

●このように、組織運営においては、資金面を含めて透明性を高め、行政や自治会等とも連携・協働を図り、信頼を高めていくことが重要である。また、参加者が組織力や地域力を発揮する貴重な人材であるとの認識に立ち、地域のリーダーとなるような人づくりをめざすことが望まれる。

③　メンバーや地域の方々の関心を高める、わかりやすい情報の共有と発信

◆地域活動においては、フィールドでの活動とあわせて、地域課題と解決のための活動等について理解を深め、適切な情報を共有し、発信していくことが重要といえる。

★会では、意見交換会・学習会等において、浦上川のゴミの現状や生物への影響などの問題点、流域の方々を巻き込む必要性、浦上川の歴史等について、問題や情報の共有を図ってきた。また、HP の運営や、自治会掲示板・コンビニ等へのポスターの掲示などを通じた広報を、ささやかながら行ってきた。

●地域課題は、それぞれの地域毎に問題の構造が異なるため、地域情報を的確に収集・分析して、そのメカニズムや解決策等を客観的にわかりやすく整理して共有し、発信していくことが必要である。その際、メンバーや関係者の地域への思いを、互いに共有していくことも大切と考える。

５．おわりに

会の活動を踏まえて、各地で地域活動を展開していく際のヒントを提案した。ここに示した事項を念頭に、私たちの会も５年間活動を継続できたと考える。

あなたの身近なフィールドでも、この提案を一つの手がかりとして、有志の方々とともに、ぜひ、できることから活動を始めていただければ、望外の喜びである。

こうしたな地域活動が、これからの地域づくりの根幹になることを願いたい。

なお、私たちの会では、これまで話し合ってきた次の３点について、これからも活動を続けながら取り組んでいきたいと考えている。

①フィールド周辺の自治会等との連携を強めるとともに、生きものたちや３Ｒ、温暖化防止のために、「ゴミを捨てないで！」、「ゴミを拾おう～」と、流域の方々に呼びかけたい。

②浦上川と流域の地域史や自然史を検証し、フィールドにある被爆石積護岸について、保全と活用方策、被爆建造物や土木学会選奨土木遺産の認定などを模索したい。

③浦上川を含む九州西岸の川のゴミは、東シナ海や日本海などの漂流漂着ゴミの原因となっている。このため、関係国の各地域における共通課題として、しっかりとした歴史認識を持ち、対話と共感を基本に、連携して取り組んでいきたい。

（参考）川まな便り　　会の HP で全てを見ることができます。（「浦上川」で検索）

２ヶ月に１度、メンバーの声や浦上川の情報などを、定例活動をお知らせするポスターと HP に掲載しています。

以下に示すように、活動を通じて感じた様々な声が寄せられています。

『思いきって初参加！』　　川まな便（たよ）り Vol.13

12 月中旬「川に学ぼうかい in 浦上川」の活動にはじめて参加しました。私のニックネームは'とき'。浦上川の近くに暮らしている、ごく普通の会社員です。

参加した目的は「地域の人達とふれあうこと」でした。短い時間でしたが、普段は接する機会のない学生や他の職業の人達と一緒に活動ができ、平凡な日常生活のアクセントになりました。

この会の良いところは自由なところです。気が向いたときにだけ参加すればよいので**気楽**です。事務局の皆さんは、この活動が何かを考えるきっかけになれば良いと思っているようで、「川に学ぼうかい」はそうした意図でネーミングされたようです。

ところが、いざ参加してみるとゴミ拾いに夢中になりました。水の流れる音を聞いたり、草の匂いを感じながらの作業は**とても新鮮**です。ときどき手を休め、下流側の海のことを考えたり、上流側の水の起源を想像したりして、**豊かな時間を過ごすことができました**。

新しい楽しみが増えた気分です。次回の川に学ぼうかいにも、ふらっと行ってみようかい。（**とき @会社員**）

第 22 回（2009.2.14）定例活動ポスターより

浦上川の生きものについて　　川まな便り Vol.17

浦上川の生きものには、山と川と海をつなぐ代表的な生きものとして、**清流の象徴的存在といわれるアユ**がいます。

長崎市内のアユは、一時期は、高度成長期以降の河川の水質悪化と1982年の長崎大水害などが災いし、市内の大部分の川で絶滅したとされていました。その後、中島川で1998年に、**浦上川でも2002年10月に生息が確認**されました。会のアドバイザーである長崎大学水産学部のSaka-P先生によれば、**アユは川と海を行き来する回遊魚**で、長崎港に注ぐ川でかろうじて生存していたアユが、近年の長崎港や浦上川の水質改善などにより、浦上川にも戻ってきた可能性があるとのことです。

現在、アユは、今年３月に公表された長崎市レッドリストにおいて、**存続基盤が脆弱な種である「準絶滅危惧種」に区分**されています。こうした浦上川の生きものや森川里海のつながりの視点から、私たち人間と自然との共存のあり方を見直していければいいな～と思うし、生きものたちのことを見つめることで、**不思議と元気が出てくる**ような気がします。　**（事務局）**

第26回（2009.10.3）定例活動ポスターより

'川まな'の活動に参加して　　川まな便り Vol.18

私は川に学ぼうかいの活動が大好きです。2ケ月に1度の活動日の日には、うきうきしながらマイ長靴を抱え、集合場所へ走って向かいます。そして浦上川の流れにふれ、社会人の方々やエコマジックのメンバーとの会話を楽しみながら浦上川周辺に落ちているごみを拾います。日常生活の中でほとんど川と接することがない私にとって、**川まなの活動は癒しと楽しさをもたらしてくれます**。

そんな川まなの活動が、先月**ゴミゼロながさき優良団体として表彰**され、私も表彰式に参加させていただきました。表彰式では他の団体の方々とも直接お話しすることができました。また、**環境意識の高い人が県内に多く存在**することを知り、環境科学部の私にとっていい刺激となりました。

今回川まなが優良団体として選ばれた理由は、地域への環境美化活動の啓発やイメージアップを促進しているからだそうです。このように**自分たちの活動が認められることの素晴らしさ**、そして**多くの人の支えにより活動ができることを幸せに感じます**。**（ジュリアン@長崎大学エコマジック）**

第27回（2009.12.12）定例活動ポスターより

Face to face　　川まな便り Vol.21

今回の活動に初めて参加し、**普段車道より見下ろす際に見せる川の表情とは全く違う一面**を見ることができました。**それは残念ながら、悪い意味での違った一面**だったわけですが、**この新しい世界を見ることができたことは私にとって大きな財産**となりました。

この体験から「**同じ目線に立って向き合うことの大切さ**」を学ばせていただきました。誰もが、いろんな環境の中で、親、子、先生、生徒、上司、部下色々な立場があり、その中で何かしらのトラブルというのはつきものですが、そのトラブルの要因となっていることの一つに、お互い同じ立場で向き合っていないということ挙げられると思います。**何に対しても、相手の立場に立って物事を考えるというのは、非常に大切なことだと改めて実感**しました。

清掃が終わり、「川に学ぼうかいin浦上川」というネーミングがどうして名づけられたのか、初めて理解できました。それと同時にすばらしいネーミングだなと感動しました！**活動を通じて、感じることはその人、その人で千差万別。また次回参加した際に、川がどういった表情をみせてくれるのか、私自身何を感じ、何を学べるのか**。次回の参加が楽しみです★よっぽどのご縁をいただき、ありがとうございます☆　**（リュ～スケ）**

第30回（2010.6.12）定例活動ポスターより